

平成24年度購入文化財一覧

【九州国立博物館】(計18件)

- 1 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 紙本墨画淡彩蟬丸図
 (しほんぼくがたんさいせみまるず)
 ○指 定 重要美術品
 ○作 者 等
 ○時 代 鎌倉時代・13世紀
 ○品 質 紙本墨画淡彩
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 本紙：縦28.5cm 横39.0cm
 表装：縦118.0cm 横52.5cm 軸長56.8cm
 ○作品概要 掛幅装。軸端象牙製。後鳥羽上皇(1180-1239)撰述の歌集『時代不同歌合』に絵を加えた、時代不同歌合絵の断簡。平安時代の歌人、蟬丸を描く。墨染めの衣を着け、杖に寄りかかり、思案する様子で、蟬丸の典型的な図像を採用する。かたわらには、『新古今和歌集』所収の蟬丸の詠歌「秋風になびく浅茅の末ごとに置く白露のあはれ世の中」を散らし書きしている。制作年代については、繊細な面貌表現や、細いながらも暢達な描線といった特徴から、平安時代末に描かれた「病草紙」や「餓鬼草紙」の一部との近さを感じさせる。しかしその一方で、脚部などに写崩れが見られ、衣文線にもやや堅さがあり、鎌倉時代・13世紀前半と推測される。鎌倉時代前期にさかのぼる歌仙絵の初期の作例としてたいへん貴重である。
 ○来 歴 関戸家旧蔵
 ○購入金額 50,000,000円(平成24年度第1回鑑査会議)



- 2 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 紙本金地著色帝鑑図 六曲屏風
 (しほんきんじやくしよくていかんず
 ろつきよくびょうぶ)
 ○指 定
 ○作 者 等
 ○時 代 江戸時代・17世紀
 ○品 質 紙本金地著色
 ○員 数 1双
 ○寸 法 等 本紙：各縦154.0cm 横360.0cm
 収納時：縦164.3cm 横63.5cm 厚10.9cm
 ○作品概要 屏風装。本作品は、明の皇帝・神宗に帝王学を説く書として張居正らが編纂した『帝鑑図説』所収の、聖君が手本とすべき善行と戒めとすべき悪行が、左右隻に6事蹟ずつ描かれた屏風である。その場面とは、善行(右隻)として諫鼓謗木、解網施仁、不受貢獻、拒関賜布、丹書受戒、下車泣罪、悪行(左隻)として羊車遊宴、脯林酒池、西邸鬻爵、縦酒妄殺、剪綵為花、坑儒焚書である。その画風は狩野光信に近似する。光信の活動期もしくはその影響が強く見られる慶長・元和年間に、周辺の有力絵師の指揮のもと制作された可能性が高い。ヴィッテルスバッハ補償基金旧蔵。
 ○来 歴 ルプレヒト・フォン・バイエルン皇太子ーヴィッテルスバッハ補償基金
 ○購入金額 113,400,000円(平成24年度第1回鑑査会議)



(右隻)



(左隻)

- 3 ○種 別 <絵画>
 ○名 称 紙本著色金胎仏画帖断簡(金剛歌菩薩)
 (しほんちゃくしよくこんたいぶつがじょうだんかん)
 (こんごうかぼさつ)
 ○指 定
 ○作 者 等
 ○時 代 平安時代・12世紀
 ○品 質 紙本著色
 ○員 数 1幅
 ○寸 法 等 本紙：縦25.0cm 横14.0cm
 表装：縦134.4cm 横40.0cm 軸長44.0cm

- 作品概要 掛幅装。軸端金銅装水晶製。金胎仏画帖は、両界曼荼羅のうち金剛界を構成する諸尊の図像を集成したもの。本図はその断簡で、金剛界の中心的な諸尊 37 尊のうち、八供養菩薩の一尊である金剛歌菩薩を描いている。表現を見ると、丸みのある面貌や柔らかな衣文線、明快な彩色など、図像ながら典雅な雰囲気をもたえており、平安時代・12 世紀の作と考えられる。平安時代以来数多く描かれた図像のうちでも、当該期の美しい仏画を彷彿させる、美しい彩色を伴った佳品である。
- なお、金胎仏画帖は、もと高野山にあったもので、応永 27 年(1420)、高野山光台院において弘真が大阿闍梨重尊から伝授され、その後、天文元年(1532)、熊本県人吉市の願成寺 8 代住持真尊が伝領し、さらに寛永 16 年(1639)に願成寺 14 代の住持堯辰が入手したという。
- 来歴 高野山光台院、熊本・願成寺伝来
 ○購入金額 30,000,000 円(平成 24 年度第 2 回鑑査会議)



- 4 ○種別 <絵画>
 ○名称 紙本墨画金泥鷹図 六曲屏風 曾我直庵筆
 (しほんぼくがきんでいたかず ろっきょくびょうぶ
 そがちょくあんひつ)
- 指定
 ○作者等 曾我直庵(生没年未詳)筆
 ○時代 安土桃山~江戸時代・16~17 世紀
 ○品質 紙本墨画金泥
 ○員数 1 双
 ○寸法等 本紙:各縦 146.7cm 横 347.6cm
 折畳時:各縦 164.3cm 横 62.2cm 厚 10.8cm
- 作品概要 屏風装。本図は、表現様式と落款印章から判断して、慶長年間(1596-1615)に堺で活躍した曾我直庵(生没年未詳)の真筆と考えられ、とりわけ狩野永徳(1543-1590)が確立した安土桃山時代の水墨技法を用いる大画面花鳥図の新出作品として貴重である。画面には、水辺の風景に合わせて 11 羽の鷹を表しているが、その表現は成長に伴う羽毛の変化を的確に描出しており、この主題を得意とした曾我直庵の現存作例の中でもとくに優れたものである。なお左隻には墨書「直庵筆」の上から基準的な印章である朱文方印「平直庵」が捺されており、この墨書は直庵の唯一の信頼できる落款である可能性が高く、重要である。
- 来歴
 ○購入金額 120,000,000 円(平成 24 年度第 2 回鑑査会議)



(右隻)



(左隻)

- 5 ○種別 <絵画>
 ○名称 紙本金地著色百花図 六曲屏風 山本宗川筆
 (しほんきんじちやくしよくひゃっかず
 ろっきょくびょうぶ やまもとそうせんひつ)
- 指定
 ○作者等 山本宗川(1679-1760)筆
 ○時代 江戸時代・18 世紀
 ○品質 紙本金地著色
 ○員数 1 双
 ○寸法等 本紙:各縦 150.0cm 横 290.0cm
 折畳時:各縦 164.0cm 横 51.5cm 厚 11.0cm
- 作品概要 屏風装。金地の背景に、右から左へおよそ春から秋へ順に多彩な草花を濃彩で描く。葉の模様や、花びらの色の濃淡などを細緻に描写し、絵具の盛り上げも随所に見られる。琳派が得意とした草花図という伝統的画題に依拠しつつ、本作品においては、花の種類が同定できるほど細かく写生的に表されている。珍しい品種の植物も多く、当時高い関心を集めた園芸や本草学の影響が背景にあると考えられる。
- 筆者・山本宗川(1679-1760、諱守房、俗名数馬、号探釣齋)は、狩野派の流れを汲む京都の画派・山本家の 4 代目当主。享保 10 年(1725)に法橋、寛延 2 年(1749)に法印に叙され、宮中や三井家の注文に応じて制作した。
- 来歴
 ○購入金額 58,800,000 円(平成 24 年度第 2 回鑑査会議)



(右隻)



(左隻)

- 6 ○種 別 <書跡>
○名 称 紙本墨書樵隱悟逸墨蹟 与無夢一清偈
(しほんぼくしょしょういんごいつぼくせき
むむいっせいにあたうげ)

- 指 定
○作 者 等 樵隱悟逸(1262-?)筆
○時 代 元時代・至順三年(1332)
○品 質 紙本墨書
○員 数 1幅
○寸 法 等 本紙：縦31.4cm 横75.2cm
表装：縦111.0cm 横77.4cm 軸長82.2cm

○作品概要 掛幅装。軸端象牙。筆者の樵隱悟逸は、中国元時代の臨濟僧。破庵派の愚極智慧の法嗣。本作品は、会下に参じた日本僧無夢一清(1294-1368)に与えた、無夢の道号に因んだ偈である。本文全10行を竹紙に行書体で墨書する。本文奥に印章3顆を捺す。表装は一文字がなく、表装裂をはじめ八双や鐙にも古態をとどめる。樵隱悟逸の現存墨蹟は、「五祖荷鋤図賛」(重要文化財、福岡市美術館蔵)、「上堂偈」(重要文化財、個人蔵)と本作品の3件と希少で、なかでも日中の禅僧の交流を物語る遺墨として貴重である。

- 来 歴 郷誠之助…原三溪…広田松繁…荻野一…
○購入金額 60,000,000円(平成24年度第2回鑑査会議)



- 7 ○種 別 <彫刻>
○名 称 菩薩坐像
(ぼさつざぞう)

- 指 定
○作 者 等
○時 代 朝鮮時代・16世紀
○品 質 陶造
○員 数 1軀
○寸 法 等 像高38.6cm

○作品概要 陶製仏像。宝冠を戴いて単髻を結び、覆肩衣、衲衣、裙を着け、右足を外にして結跏趺坐する。陶器質の胎土をもって手捻りで塑形、冴青沙器の技術で制作する。髣部と比べて大きな頭部、狭い肩幅、膝高が厚く膝張を抑えたプロポーションなどは、高麗時代末期から朝鮮時代前期(14世紀後半から16世紀)にかけての彫像の特徴を示す。高麗時代末期以降、次第に類型的で平板な造形が目立ってくるが、本像はこの時代通有の類型的造形を示さず、肉身や衣袈の抑揚、衣端の処理を自然に処理しており、彫刻としての完成度は高い。朝鮮半島では陶製仏像も相当数制作されたと想像されるが、完形の遺品は稀少である。陶磁史研究においても注目すべき佳作といえる。なお、本像は対馬島内の寺院に伝来したものであり、中近世における日朝間の活発な往来の過程で請来された遺品とみてよい。

- 来 歴 修善庵伝来(長崎県対馬市厳原町)
○購入金額 24,990,000円(平成24年度第3回鑑査会議)



- 8 ○種 別 <陶磁>
○名 称 色絵桐亀甲文大皿
(いろえきりきっこうもんおおざら)

- 指 定
○作 者 等 伊万里(有田)
○時 代 江戸時代・17世紀後半~18世紀前半
○品 質 色絵磁器
○員 数 1点
○寸 法 等 器高4.8cm 口径34.4cm 底径19.8cm

○作品概要 色絵磁器の大皿。内面に桐文様を散らし、4分の3を籠目状に亀甲文を表す。外側面は桜川文を施し、底部には丁子花文をいれる。染付の青、色絵の赤、緑、黄、金色など多彩な色を用いる。本作品は、伊万里(有田)の色絵磁器において元禄期の金襴手様式と考えられるものである。金襴手様式は肥前の色絵磁器の中で古旧谷様式、柿右衛門様式、鍋島様式とともに代表的な様式である。豪華な金彩と艶やかな上絵付けが特徴である。本作品はその特徴を良く捉えており、元禄期の金襴手様式の代表的な優品である。また、輸出品としても知られ、同様の写しがヨーロッパや中国で作ら



れた。しかし、本作品は文政年間に箱をかえたという箱書きが残っていることから、日本に伝世してきたことからの貴重な作品である。

○来歴
○購入金額 18,000,000円（平成24年度第1回鑑査会議）

9 ○種別 <染織>
○名称 前田家伝来名物裂帖
(まえだけでんらいめいぶつぎれちょう)

○指定
○作者等
○時代 元～明時代・13～17世紀
○品質 冊子仕立
○員数 1冊
○寸法等 縦110.5cm 横49.0cm 厚3.0cm

○作品概要 本品は、加賀前田家に伝来した名物裂帖。雲母引きした台紙を糸かがりで綴じ、冊子仕立とし、38面の台紙には裏打ちされた印金、金紗、金羅、銀紗、金襴、緞子の裂が300枚近く貼られている。中でも金紗や金羅などの最上の薄物や印金が大部分を占めること、また、裂の大きさに特色がある。それぞれの裂横には寸法を墨書した貼紙を貼り、天地2箇所「前田」の朱印を押している。一部、裂上に「○張込分」と墨書した貼紙があることや、台紙に割印が認められないものがあることから、後に貼り直された裂もあることが窺えるが、ほぼ欠損のない状態の裂帖として、また、他の名物裂帖の内容を補完する資料として極めて貴重である。

○来歴 前田家伝来
○購入金額 126,000,000円（平成24年度第3回鑑査会議）



10 ○種別 <考古>
○名称 伝青森県出土 屈折像土偶
(でんあおもりけんしゅつど くっせつぞうどぐう)

○指定
○作者等
○時代 縄文時代・前2000年～前1000年
○品質 土製
○員数 1点
○寸法等 高10.3cm 幅7.1cm 奥行8.3cm

○作品概要 土偶は直立したものが主体であるが、縄文時代後期から晩期の東北地方では、本例のように座ったような姿勢をとる土偶も少数知られている。このような姿勢の土偶には腕の組み方や脚の置き方にバリエーションがあり、「腕を組み立て膝をする土偶」「蹲踞姿勢の土偶」「合掌土偶」等と呼ばれることもある。その姿勢は、祈りの姿勢、休憩姿勢、座って出産する座産の姿勢ともいわれており、縄文時代の土偶祭祀を考える上で大変興味深い。本品は、背中を球形に丸めること、脚部を短く作り膝を曲げていないこと、足首以下が表現されていないことなど、屈折像土偶の中でもデフォルメが著しい点はこれまでに類例が無く大変貴重である。

○来歴
○購入金額 7,350,000円（平成24年度第3回鑑査会議）



11 ○種別 <考古>
○名称 伝青森県つがる市木造亀ヶ岡出土 中空土偶
(でんあおもりけんつがるしきづくりかめがおかしゅつど ちゅうくうどぐう)

○指定
○作者等
○時代 縄文時代・前2000年～前1000年
○品質 土製
○員数 1点
○寸法等 高12.5cm 幅18.0cm 奥行5.1cm

○作品概要 直立した逞しい姿の中空土偶。体部の磨消縄文と貼瘤が縄文時代後期後半の東北地方の土器群である「瘤付土器」のモチーフであることから、本品も同時期のものと考えられる。隆帯で顔面を表現する手法もこの時期に特



微的なものである。土偶は製作技術から内部が中実のものの中実のものに分けられる。東日本の縄文時代後期後半の土偶は中実の小形品が多く、優品も少なくない。しかし、同時期の中空土偶は大形化を示すものの、ほぼ完形に残るものは北海道著保内野遺跡出土の中空土偶（国宝、函館市教育委員会所蔵）1例のみで、他は全て破片である。本品は、下半身を欠くものの、著保内野の例に次ぐ残りの良さであり、中空土偶の数少ない優品である。

○来歴

○購入金額 5,250,000円（平成24年度第3回鑑査会議）

12 ○種別 <考古>

○名称 青森県岩木川流域出土 深鉢形土器
（あもりけんいわきがわりゆういきしゅつど
ふかばちがたどき）

○指定

○作者等

○時代 縄文時代・前1000年～前400年

○品質 土製

○員数 1点

○寸法等 高44.8cm 最大径46.0cm 底径14.0cm

○作品概要 平底で砲弾形の深鉢形土器。外面上3分の1に雲形文を施す。東北地方の縄文時代晩期の土器で、亀ヶ岡式土器と呼ばれる。雲形文が単純化しつつあることから、晩期でも後半、土器型式でいえば大洞C2式土器と考えられる。亀ヶ岡式土器には複雑な文様を施した精製土器が良く知られているが、多くは小形品や中形品である。大形品は極めて少なく、中でも残りの良い本品は数少ない優品である。縄文時代晩期後半は、九州では水田稲作が開始されており、弥生時代早期とも言われている。この時期の亀ヶ岡式土器は、福岡県雀居遺跡や大分県植田市遺跡など、東北から遠く離れた九州でも出土しており、当時の文化交流を考える上で大変重要である。

○来歴

田中順三旧蔵、田中縄文文化館（埼玉県飯能市）閉館後、売渡申込者へ譲渡された。

○購入金額 15,750,000円（平成24年度第3回鑑査会議）



13 ○種別 <歴史資料>

○名称 勸修寺家文書
（かじゅうじけもんじょ）

○指定

○作者等

○時代 鎌倉時代・弘安9年(1286)～安土桃山時代・天正17年(1589)

○品質 紙本墨書

○員数 2巻

○寸法等 上巻(23紙)：縦38.0(軸含42.8)cm 横1213.0cm

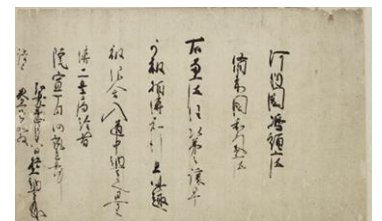
下巻(20紙)：縦38.0(軸含42.5)cm 横1028.9cm

○作品概要

卷子装。軸首木製。勸修寺家は藤原北家高藤流に属し、家格は弁官・藏人を経て納言に至る名家である。本文書は、この勸修寺家領に関する讓状・院宣・御内書などの文書を貼り継ぎ2巻としたもので、上巻には弘安9年(1286)から明德3年(1392)までの文書18通、下巻には応永10年(1403)から天正17年(1589)までの文書32通を収める。勸修寺家領の一つ、加賀国井家荘の領家職をめぐる勸修寺家と二条家の間で度々相論が生じたことで知られるが、本文書にはこの相論に関する勸修寺家側の史料が多数収録されている。

○来歴

○購入金額 35,000,000円（平成24年度第1回鑑査会議）



14 ○種別 <歴史資料>

○名称 紙本墨書安南国副都堂福義侯阮肅書
（しほんぼくしよあんなんこくふくとどうふくぎこうげんしゆくしよ）

○指定

○作者等

○時代 ベトナム・後黎朝 光興14年(1591)

- 品 質 紙本墨書
- 員 数 1幅
- 寸 法 等 本紙：縦 33.3cm 横 34.9cm
表具：縦 115.4cm 横 48.6cm 軸長 54.4cm
軸径：2.8cm 朱印：縦 9.9cm 横 9.8cm
墨印「書に横線」縦 7.0cm 横 8.0cm
墨印(花押)縦 6.6cm 横 8.1cm

○作品概要 掛幅装。軸首木製頭切軸。安南国副都堂福義侯阮から日本国国王に宛てたもの。内容は、次の通りである。前年に陳梁山というものに見えて日本国王が雄象を好むことを聞きましたので、陳に象を付しましたが、船が小さくて載せられなかったので、好い香などを送りました。隆巖というものが当国に来て陳梁山と財物はいまだ見ていないと謂うので、再び財物を与えました。両国の往来交信のため、書を送ります。
『外蕃通書』や『通航一覽』によると、我が国とベトナムとの通航は、弘定 2 年(1601)の広南阮氏から徳川家康へ当てた書簡に始まるとされている。しかし、本書簡は 1601 年を 10 年もさかのぼる現存最古のベトナムから我が国へもたらされた書簡である。

- 来 歴
- 購入金額 3,000,000 円(平成 24 年度第 1 回鑑査会議)

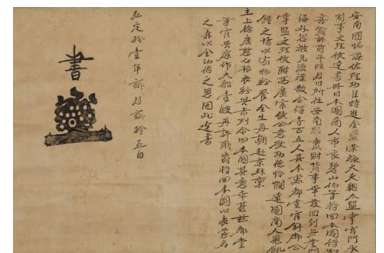


- 15 ○種 別 <歴史資料>
- 名 称 紙本墨書安南国臣文理侯書
(しほんぼくしよあんなんこくしんぶんりこうしよ)

- 指 定
- 作 者 等
- 時 代 ベトナム・後黎朝 弘定 11 年(1610)
- 品 質 紙本墨書
- 員 数 1幅
- 寸 法 等 本紙：縦 29.5cm 横 43.6cm 表具：縦 109.0cm 横 54.8cm
軸長：58.4cm 軸径：2.4cm 墨印：縦 6.6cm 横 8.1cm

○作品概要 掛幅装。軸首木製頭切軸。本書簡は、慶長 14 年(1609)に安南に渡航し、帰途に難破した角倉船の日本国商人市良碧山伯等に対する文理侯の達書である。角倉船は 5 月 1 日又安(ゲアン)に到着し、1 ヶ月にわたる通商の後、6 月 11 日に出航したが、まもなく丹崖海門の沖合いで難破した。救助された 105 名は、舒郡公、文理侯、廣富侯によって分担して給養された。また、侯達は国王に上申し、食料や衣服、大船が支給されることになった。この達書には、以上の経緯がまとめられている。関連史料は『異国日記』や『外蕃通書』、『通航一覽』にも収められており、文理侯の名もみえる。文理侯はハノイに本拠をおいていた鄭氏の臣下と考えられる。

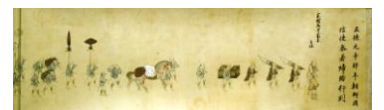
- 来 歴
- 購入金額 1,800,000 円(平成 24 年度第 1 回鑑査会議)



- 16 ○種 別 <歴史資料>
- 名 称 紙本著色正徳元年朝鮮通信使参着帰路行列図巻
(しほんちゃくしよくしよとくがんねんちようせんつうしんし
さんちゃくきろぎょうれつずかん)

- 指 定
- 作 者 等
- 時 代 江戸時代・18~19 世紀
- 品 質 紙本著色
- 員 数 2 巻
- 寸 法 等 上巻：縦 26.6cm 横 1508.4cm
下巻：縦 26.6cm 横 1817.8cm

○作品概要 卷子装。軸端象牙。本図は、正徳元年(1711)来日の第 8 回朝鮮通信使を描く行列図である。幕府老中土屋政直は、通信使の江戸までの道中、江戸参着、江戸城登城、江戸発足の 4 場面の図巻を対馬藩に献上させた。現存する諸本として、従来、将軍家献上本(大阪歴史博物館所蔵)、土屋家本(高麗美術館所蔵)、対馬宗家控本(大韓民国国史編纂委員会所蔵)、および対馬宗家伝来の原図(福岡市博物館所蔵)が知られてきた。本図は、将軍家本の「朝鮮国書捧呈行列図巻」、対馬宗家控本の「朝鮮国之信使参着帰路行列図巻」、対馬宗家伝来原図の 1 巻(内題欠)と類似する構図であり、行列



(上巻)



(下巻)

の配列、描写方法等を勘案すれば、原図を底本として若干の変更を加えたものと判断される。

○来歴

○購入金額 25,000,000 円（平成 24 年度第 2 回鑑査会議）

- 17 ○種別 <歴史資料>
○名称 紙本着色伊豆東半部及七島図
(しほんちゃくしよくいずとうはんぶおよびしちとうず)

○指定

○作者等 伊能忠敬(1745-1818)作

○時代 江戸時代・19 世紀

○品質 紙本着色

○員数 1 幅

○寸法等 本紙：縦 150.1cm 横 47.5cm

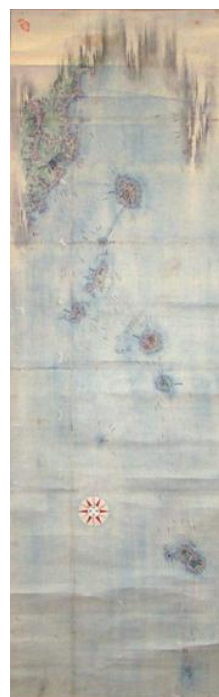
表具：縦 176.0cm 横 54.9cm 軸長 59.8cm

○作品概要 料紙楮紙。掛幅装。軸端木製。本図は、伊能忠敬の第 9 次測量事業で制作された縮尺 216,000 分の 1 の地図で、伊豆半島東半部、伊豆七島、相模小田原を範囲とする。文化 12 年(1815) 5 月～13 年正月の測量成果を反映しており、江戸帰着後(同 13 年 4 月)の制作と推測される。当該地域の地方図(下図)を針突法で写して着色した段階の伊能中図で、他地域の地図と統合される前段階の形態を留めており、地方図(下図)から最終上呈本に至る伊能図の制作過程の一端を伝える資料として貴重である。峰文庫(長崎歴史文化博物館所蔵)に伝わる同系統の模写本は、幕府天文方の「秘図」を底本としたものであることが知られ、本図が天文方高橋景保への提出本である可能性もある。

○来歴

大谷亮吉(1875-1934)旧蔵

○購入金額 12,000,000 円（平成 24 年度第 2 回鑑査会議）



- 18 ○種別 <歴史資料>
○名称 紙本墨刷手彩色万国総図・民族図譜
(しほんぼくさつてざいしきばんこくそうず・みんぞくずふ)

○指定

○作者等

○時代 江戸時代・17 世紀

○品質 紙本墨刷手彩色

○員数 2 幅

○寸法等 万国総図 本紙：縦 128.8cm 横 55.4cm

表具：縦 194.5cm 横 58.4cm

軸張：64.2cm 軸径：2.6cm

民族図譜 本紙：縦 128.5cm 横 55.6cm

表具：縦 194.5cm 横 58.4cm

軸張：64.2cm 軸径：2.6cm

○作品概要 掛幅装。軸首黒漆塗撥軸。本図は、我が国最初の刊行世界図である正保 2 年(1645)の下関市立長府博物館所蔵「万国総図・民族図譜」(以下、長府本という)の直系に連なるもので、おそらく上方の業者が市販するために長府本を模倣して作成したものと推定される。

民族図譜の序文では、長府本には「正保 酉」とあった箇所が「正保丁酉」となっているが、「丁酉」という干支の年は正保年間には無いことから、本図の刊行は正保 2 年(1645)を下るものである。長府本の系統の図は後世まで刊行され続けるが、本図は諸本との関係からみて 1660 年代を下らない時期までに作成されたとみられる。

対幅として現存するのは、本図の他には、神戸市立博物館本と大英図書館本の 2 本のみが知られており、たいへん希少である。

○来歴

○購入金額 12,495,000 円（平成 24 年度第 3 回鑑査会議）



(民族図譜)



(万国総図)